「日々の理科」（第 1892 号） 2019,-9,13

「アサガオ“まるごと”観察（４）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

私が子どもの頃は、身の回りの自然物にはすべて興味を持ち、手当たり次第関わりを持とうとした。たとえば、浅川（多摩川の支流）の河原でジュズ（数珠）の群落を見つけ、友達と「誰が早く千個とれるか？」と競争したり、丘陵地の公園でまだ暗いうちからカブトムシ採りもした。花を見つければ、片っ端から採って、切り開いてみたものである。しかし今の子どもたちにとって「花のつぼみを切り開く」ということは、非常に特別な体験のようだ。

アサガオのつぼみを縦に裂くと、花弁の中から「雄しべ」と「雌しべ」が現れる。「雄しべ・雌しべ」という言葉は知っていても、そのことを意識して観察するのは初めてという子どももいる。しかし誰もが、１本だけ先端が丸い形のものがあることに気づく。

「雌しべ」は１本がだ、「雄しべ」は複数ある。ほとんどの子どもは、その数を知ろうと数える。

観察を続けるうちに、子どもたちは興味深いことに気づく。つぼみ（左）では、雌しべのほうが雄しべよりも長いのに、咲き終わった花（右）では、その逆になっているのだ。これはほとんど例外がない。

ピンセットで雄しべを取り去ると、雌しべ（花柱と柱頭）だけが残る。その花柱の根元が、少しふくらんでいることに気づく子どもも多い。

アサガオの長いツルから採取した花は、「自分のもの」となる。スケッチとは別に、自分のノートに貼っておきたいと思う気持ちはよくわかる。数日で変色し、終いにカビが発生したりするのだが、私はこの営みが大切だと思っている。